様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１００６

研究課題名（和文）ルソーにおける孤独の教育的意義の考察―ペトラルカの人文主義哲学を参照枠組として―

研究課題名（英文）A Study of Educational Significance of Solitude in the case of Rousseau, as compared with Petrarch's Humanism Philosophy

研究代表者
室井　麗子（MUROI, Reiko）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０５５２８５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：ルソーが孤独とその実践に見出した人間形成的意義を、「霊的な訓練exercice spirituel」の中の「孤独の訓練」を分析枠組みとして、さらに、ペトラルカの孤独論を参照枠組みとして検討した。その結果、ルソーは、「孤独の訓練」を含む自己教育を通して自らの思想・哲学を構築したのであり、このような自己教育こそがルソーの教育思想の肝要であるという可能性を明らかにした。さらに、このことは従来の教育学研究ではサブテクストとして扱われてきたルソーの自伝的著作群を教育学のテクストとして再読することで明らかにできる可能性を提示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined educational significance of solitude in the case of Rousseau as compared with Petrarch's humanism philosophy, from the perspective of ≪exercise of solitude≫ as one of ≪spiritual exercises≫. As a result, I found that 1) Rousseau constructed his thought and philosophy through self-education, an important part of which was ≪exercise of solitude≫, and 2) self-education as such would be crucial element of his thought on education. I further concluded that this point would become clear by reexamining Rousseau's autobiographic works as main-text — not as sub-text as in preceding studies — of education and pedagogy.

研究分野：社会科学

キーワード：ルソー　孤独　霊的な訓練　自己実践　ペトラルカ　教育思想史　P．アド

１．研究開始当初の背景

「孤独 solitude」は人間形成においていかなる意味・意義を持ち得るのか。昨今、「孤立 isolation」や「寂しさ loneliness」と区別しながら「孤独 solitude」を再評価する、あるいは「自己内対話」の人間形成的意味を再考しようとする動きはあるものの、「つながり」や「絆」を前にした途端それらは第二義的なものとされてしまう。しかし元来、「人とつながること」と「孤独」とは不可分であると考えられてきた。例えば、古代ローマのストア派のセネカは『心の平静について』で次のように述べている。「一人きりでいることと、群衆の中に入っていくこと、この二つが交互に繰り返されなければならない。前者はわれわれに人恋しさを、後者はわれわれにわれわれ自身への恋しさを惹起し、両者は互いを癒す薬となるであろう」(『セネカ哲学全集１』大西英文ほか訳、岩波書店、2005 年)。

セネカから深く影響を受けた思想家に J.-J. ルソーがいる。そして、ルソーの教育理論の中に、まさにセネカの上のような構図を見出すことができる。ルソーが彼の教育論の中で孤独にどのような人間形成的意義を認めたのかを明らかにすることで、孤独の教育的意義を再評価し、さらにそこから人間と人間とのつながりそのものも再評価できるのではないかと考えた。同時に、この点を解明することで、ルソーの教育思想・教育哲学を再読する新たな観点も得られるのではないかと考えた。

２．研究の目的

上記のような問題意識のもと、下記のとおり研究の目的を設定した。

「社交性 sociabilité」に第一義的な価値が付与された 18 世紀フランスにあって、ルソーは、先述のとおり、孤独に人間形成的・教育的な意義を見出し、さらには、「孤独の実践」「孤独の訓練」を通して自己自身を形成した思想家でもあった。本研究は、ルソーが孤独とその実践に見出した人間形成的・教育的意義の内実を明らかにすることを目的として設定した。そのための分析枠組みとして、本研究代表者がこれまでルソー教育思想の分析枠組みとして用いてきた、フランスの思想史研究者 P.アドらが提起する「霊的な訓練 exercice spirituel」を採用し、その中でもとりわけ「瞑想」や「自己内対話」といった「孤独の実践」「孤独の訓練」を用いることにした。さらに、ルソーに大きな影響を与え、思想史上も重要な孤独の理論家・実践家であるペトラルカの孤独論を本研究の参照枠組みとした。そうしてルソーにおける孤独の意義を思想史的にも明らかにすることを目指した。

このような作業を通して、近代においても実は継承されている孤独の人間形成的・教育的意義やその実践を掘り起し、ひいては、人間と人間とがつながることの今日的意味を、孤独との関係において再考することとした。

３．研究の方法

以下の 5 つの方法・作業を中心に本研究を遂行した。

（１）分析枠組みの精緻化—「霊的な訓練」の中の「孤独の実践」「孤独の訓練」に関わる文献の解読・分析。

本研究の分析枠組みである「霊的な訓練」ならびに「孤独の訓練」「孤独の実践」に関わる P.アドや J.ドマンスキーらの文献の解読・分析を進め、分析枠組みの一層の精緻化を試みた。

（２）参照枠組みの精緻化—ペトラルカの孤独論、特に『孤独生活論』および『宗教的閑暇』とこれらの先行研究の解読・分析。

（３）ルネサンス人文主義哲学に関わる文献の解読・分析。

（４）18 世紀ヨーロッパにおける「孤独」をめぐる議論の整理・分析。

（５）ルソーの著作『エミールとソフィ』、『告白』、『孤独な散歩者の夢想』とこれらの先行研究ならびにルソーにおける孤独の意義に関する先行研究の再読・精読・分析。

上記（１）～（４）で得られた成果をもとに、ルソーにおける孤独の人間形成的・教育的意義や意味の解明を試みた。

４．研究成果

（１）本研究の分析枠組みである「霊的な訓練」ならびに「孤独の訓練」「孤独の実践」に関わる P.アドや J.ドマンスキーらの文献(P. Hadot, *La citadelle intérieure: Introduction aux Pensées de Marc Aurèle*, Fayard, 1992; P. Hadot, *Qu'est-ce que la philosophie antique?*, Gallimard, 1995; P. Hadot, *Exercices spirituels et philosophie antique*, édition augmentée, Albin Michel, 2002; J. Domański, *La philosophie, théorie ou manière de vivre?: les controversies de l'Antiquité à la Renaissance*, Édition Universitaires Fribourg Suisse, 1996.など）の解読を通して、分析枠組みを精緻化する作業を実施した。その結果、ルソーにおける孤独の人間形成的・教育的意義を分析する観点や方法等について一層明確にすることができた。アドやドマンスキーによると、孤独の訓練や実践において自己を考察し、その考察を言語化することは「自己教育・自己形成の鍛錬」そのものであり、ルソーにおける孤独の教育的意義は、まさにこのようなものとして解釈し得るということが明らかになった。

（2）本研究の参照枠組みであるペトラルカの孤独論やそれに関する先行研究を解読・整理し分析した結果、ペトラルカに加えて、アウグスティヌスや、とりわけマルクス・アウレリウスもまた、ルソーにおける孤独の人間形成的・教育的意義を思想史的に明らかにするための有効な参照枠組みであることがわかった。

（3）アドは、「自己教育・自己形成の鍛錬」による「内なる砦の構築」の遂行として、マルクス・アウレリウスの『自省録』やその執筆の意味を分析している（P. Hadot, *La citadelle intérieure: Introduction aux Pensées de Marc Aurèle*, *op.cit.*; cf. 荻野弘之『マルクス・アウレリウス『自省録』―精神の城塞』、岩波書店、2009 年）。先述のとおり、このようなアドの研究から、ルソーにおける孤独の人間形成的・教育的意義を思想史的に検討するためのさらなる参照枠組みが判明したわけだが、それに加えて、本研究で考察・分析対象としたルソーの自伝的著作群は、まさに彼の「自己教育・自己形成の鍛錬」の書として、ひいては教育学の「メインテクスト」として、再読し得る可能性も明らかになった。

（4）本研究で考察・分析した『告白』『孤独な散歩者の夢想』、さらに『ルソー、ジャン=ジャックを裁く』といったルソーの自伝的著作群は、これまで主に文学の領域で研究が担われ、近代的自己を描くルソーの「エクリチュール」等が俎上に載せられ、ルソーがいかに自伝文学の創始者であり完成者であったかが論じられてきた（cf. P.ルジュンヌ『自伝契約』、花輪光監訳、水声社、1993 年）。しかし近年は、ルソーの自伝的著作群は、文学的作品であると同時に哲学的著作としても捉えられており、それらにおける文学的要素と哲学的要素の不可分性への自覚のもと、新たな研究の局面が展開されている（cf. B. ベルナルディ『ジャン=ジャック・ルソーの政治哲学』、三浦信孝編、勁草書房、2014 年；越森彦「自伝の戦略―『ボーモンへの手紙』におけるエートス―」、永見文雄他『ルソーと近代―ルソーの回帰・ルソーへの回帰』、風行社、2014 年）。

このような研究の流れを継承しつつ、自己考察とその言語化の実践を「自己教育・自己形成の鍛錬」と捉えるアドの観点を採用し、ルソーの自伝的著作群を彼の教育思想・教育哲学のメインテクスト（従来の教育学研究においては、これらの著作群は「サブテクスト」として扱われてきた）として再読することでルソーにおける孤独の人間形成的・教育的意義を明らかにし得るということが指摘できた。さらに、このような解明から、ルソーの教育思想・教育思想の内実を捉えるための新たな方向性が提示できる可能性が見えてきた。

（5）上記（1）の、本研究の分析枠組みを精緻化する作業の一環として、アドの『古代哲学とは何か』（*Qu'est-ce que la philosophie antique?*, *op.cit.*）の全編を邦訳し、概ね訳し終えた。同書において、アドは、詳細な分析は行っていないものの、ルソーを「霊的な訓練」の重要な思想家の一人に挙げている。このアドの指摘によって、ルソーの教育思想・教育哲学を「霊的な訓練」から再読するという、本研究の基本的方向の妥当性を改めて確認することができた。

（6）人間と人間とがつながることの今日的意味を、孤独との関係において再考することについては十分に深めることができなかった。引き続き考察を進めることとした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①<u>室井麗子</u>、「戦後教育学における「国民の教育権論」とルソーの教育思想―教育学と法学・政治学とのあいだで―」、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会）、第 25 号、査読有、2016 年、95－103 頁。

②<u>室井麗子</u>「教育学では読まれてこなかった「教育学の古典」―ルソーの自伝的著作群―」、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会）、第 25 号、査読無、2016 年、168－169 頁。

③<u>室井麗子</u>「図書紹介 ジョージ・ハウイ著 増渕幸男・神門しのぶ訳『聖アウグスティヌスの教育理論と実践』」、『教育学研究』（日本教育学会）、第 82 巻第 3 号、査読無、2015 年、82－83 頁。

④ <u>Reiko Muroi</u>, «Crossing Philosophical Boundaries: Translation as Heterolingual Address, Boundary-Probing, and Mutual Renewing», *Knowledge Cultures*, vol.2, no.1, 査読有, 2014, pp.40-50.

⑤神門しのぶ、鈴木宏、馬上美知、<u>室井麗子</u>「spiritual exercise としての教育哲学の再構築」、『教育哲学研究』（教育哲学会）、第 109 号、査読無、2014 年、116－122 頁。

〔学会発表〕（計 5 件）

①<u>室井麗子</u>「戦後教育学における「国民の教育権」とルソーの教育思想―教育学と法学・政治学とのあいだで―」、教育思想史学会第 25 回大会（シンポジウム 1「戦後教育史と近代教育学批判」）、2015 年 9 月 12 日、慶應義塾大学（東京都港区）。

②室井麗子「教育学では読まれてこなかった「教育学の古典」—ルソーの自伝的著作—」、教育思想史学会第 25 回大会（コロキウム 1「教育思想史の「裏面」を問う—「古典」はどう読まれてこなかったのか—」）、2015 年 9 月 13 日、慶應義塾大学（東京都港区）

③Reiko Muroi, Touch and Know: an Exploration into Theories on Tactile letters and Tactile books, Asian Link of Philosophy of Education 2015 Winter Seminar, 2015 年 1 月 23 日, National Chiayi University（嘉儀市（台湾））.

④Reiko Muroi, Confucian teaching and Socratic teaching: A commentary on Professor Duck-Joo Kwak's presentation, Harvard-Yenching Institute Academic Workshop 2014, 2014 年 7 月 11 日、Seoul National University（ソウル（大韓民国））.

⑤ 室井麗子「「古典」創出と翻訳—ルソー『エミール』の邦訳史を通して見た教育（哲）学形成—」、教育哲学会第 57 回大会（研究討議「「教育学の古典」はいかに創られ、機能してきたのか—教育哲学のメタヒストリー—」）、2014 年 9 月 13 日、日本女子大学（神奈川県川崎市）。

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
室井　麗子（MUROI, Reiko）
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０５５２８５７

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）